



趣味のハイキングで静岡市葵区の高山・市民の森を訪れる

進学を決めました。大学院では、文化人類学の視点から静岡市在住の外国人の子育てや生活実態、地域社会との関わりについて質的調査を行い、多文化共生のあり方を問い直す研究に取り組んでいます。特に、外国人親子との信頼関係の構築など、フィールドワークに力を注いできました。また、多文化共生審議会委員や外国人相談員としての活動を通じて、現場と制度の両面から多文化共生について考えてきました。

将来は、多文化共生を現場で実践しながら、行政・教育機関・民間組織・地域住民をつなぐコーディネーターとして、誰もが安心して暮らせる地域社会づくりに貢献したいと考えています。

Vol.11

多文化共生を実践し、人々をつなぐコーディネーターに

ドーハーフォン(ベトナム出身)

人文社会科学部 言語文化学科(2020年卒業)

(2024年4月より人文社会科学研究科 所属)

2025年7月より公益社団法人静岡県国際経済振興会 勤務

静岡大学は地域との連携が強く、地域に根ざした豊富な研究蓄積を生かして、地域課題を専門的に分析し、実践へとつなげる力を養うことができると考え、



現在の仕事で参加したABP 10周年記念パーティーにて恩師と再会



静岡大学の授業の一環で「留学生と学ぼう!」を開催



アジアブリッジプログラム(ABP)は、静岡県とアジア諸国の架け橋として活躍する人材を育成するため、企業や自治体と連携して、静岡大学で学ぶ留学生を応援しています。ご支援いただいている企業の皆様のおかげで、開講10周年を迎えることができました。



ABPについて



ABP10周年記念特設サイト

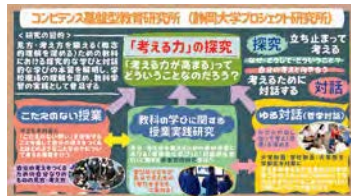
プロジェクト vol.3 研究所レポート

プロジェクト研究所は、学内研究者の連携や産学官連携を促進し、自主的な研究活動を支援する静岡大学独自の制度です。学部を越えた連携や企業など外部の研究者との連携により、未来をリードする新たな研究が生まれています!



コンピテンス基盤型教育研究所

「考える力が高まるってどういうことなのか」について、問いを深めるための探究や対話に関する研究に取り組んでいます。教科の知識を身に付けることを通して、「考える力が育つ」ではなく、「考える力を育むために教科を学ぶ」という視点から、教科における見方・考え方や「概念を理解すること」の意味を探究していきます。また、探究的・対話的な学びの本質を明らかにし、その成果を学校現場で授業実践につなげることを目指しています。



「考える力」の探究(「考える力」が高まるってどういうことなのだろう?)



研究所長
教育学部
野津 一浩 准教授

研究所WEBサイト



・考える力
・探究
・見方/考え方
・対話

データ駆動型ソリューション研究所

AI応用力を備えた課題解決型人材の育成を目指して、企業向けDXソリューションを提供する情報系企業と連携し、数理・データサイエンス教育カリキュラムの研究・開発を進めています。2025年度は、研究所企画の地域課題探究を学んだ学生が、藤枝市立図書館の利用実態について機械学習やデータ分析を行い、改善策を市の担当者に提案しました。また、藤枝東高校2年生に地域課題解決を通じた数理データサイエンスの魅力を紹介しました。



研究所企画の地域課題探究を学んだ学生が高校生に数理データサイエンスを紹介



研究所長
理学部
田中 直樹 教授

研究所WEBサイト



・数理データサイエンス教育
・産学連携
・AI応用力育成
・地域課題の解決

Shizudai Mini News

4月・7月に記者懇談会で 本学の最新の取組を紹介

本学では、報道機関の皆様にも本学の特色ある研究や地域・国際連携活動への理解を深めていただく機会として、記者懇談会を定期的に行っています。

今年度第1回は、4月24日に静岡キャンパスで開催しました。プロジェクト研究所の



未来創成ビジョンを説明する日誌学長

事例として「登呂遺跡で栽培した赤米による日本酒造り」(発酵とサステナブルな地域社会研究所、登呂農耕文化研究所)について、横濱竜也教授、大原志麻教授、篠原和教授(人文社会科学部)、丑丸敬史教授(理学部)が説明しました。



(左より)大原教授、横濱教授、登呂遺跡赤米試験醸造酒

さらに、循環型社会の実現に向けた研究として、静大発ベンチャー企業のS-Bridges株式会社による植物由来の未利用資源の有効活用、Aoi

Gin Craft Technology株式会社による静岡の特産品を活用したクラフトジンの開発・販売について、一家崇志教授(農学部)が説明しました。



一家教授



クラフトジン

第2回は7月17日に浜松キャンパスで開催しました。インドの連携大学や自治体、企業との協働による世界展開力強化事業「InSPIRE」(インスパイア)について、栗井光一郎副学長が「人的交流を通じて、産業高度化と地域社会に貢献する人材を育成したい」と説明しました。

また、プロジェクト研究所の事例紹介として、「土木情報学研究所」の所長を務める木谷友哉教授(情報学部)が、地域インフラをデータで守る研究について説明しました。



栗井副学長



木谷教授

キャンパスアイデア甲子園 アイザワ証券との連携10周年

本学とアイザワ証券株式会社の包括連携10周年を記念し、「キャンパスアイデア甲子園」を開催しました。大学生活で感じる課題や困り事の解決策を提案するもので、多数の応募から7チームが決勝に進出し、アイデアを磨き上げて発表しました。



最優秀賞に選ばれたのは、留学生の日本語学習や生活支援を目的としたアプリ「シグッピー」の開発を提案したチームです。今後100万円を上限に、本学と同社の協力のもと、学内で実現に挑戦できます。リーダーの吉田厚輝さん(教育学研究科2年)は「学部も言語も異なるメンバーが得意分野を生かして考えた」とチーム力をアピール。実現に向けて意欲を語りました。



どの発表もすごい! 決勝の動画はこちら

逃げる“かがく”は役に立つ!? 親子向け防災教育で全国表彰

本学防災総合センターなど4機関が実施する防災・減災ワークショップ「ヤバい! 逃げる“かがく”は役に立つ!」が、第12回ジャパン・レジリエンス・アワード(強靱化大賞)2026で優秀賞を受賞しました。小学生と保護者を対象に、災害時の避難や防災を体験的に学ぶプログラムで、2020年から開催しています。



参加者たち
河川地形模型で防災を学ぶ

本学の前田賢治准教授が企画運営や講演を担当し、学生もファシリテーターとして参加。防災意識の変化を聞いたアンケートでは、参加者だけでなく、学生の意識向上が確認されており、防災人材の育成や地域のレジリエンス向上への貢献が高く評価されました。今後も研究成果の社会実装を進め、地域に根差した防災・減災活動に取り組んでいきます。

インドのSRM科学技術大学と InSPIREプログラム協定を締結

本学が2013年に学術交流協定を締結して以来、交流を重ねてきたインドのSRM科学技術大学(SRMIST)の学長らが7月27日、本学を訪問し、InSPIRE(インスパイア)プログラムに関する協定を締結しました。調印式には両大学の学長らが出席し、今後の連携強化に向けた決意を共有しました。



InSPIREは、本学がインドの大学や自治体、企業と連携して推進する人材育成プログラムです。本協定により、学生の派遣・受入れや研究者交流をさらに促進し、教育・研究の両面で連携を深めながら、両大学の協力関係を新たな段階へと発展させていきます。

一行は、本学学生のインド研修壮行会に参加し、農学部の研究施設なども視察しました。今後、研究分野における連携や交流のさらなる発展が期待されます。



情報学部30周年記念式典開催 新キャラクター「じじじ」誕生

本学情報学部は、創立30周年を記念して記念式典・祝賀会を開催し、来賓や卒業生、学生、教職員など約150人が節目を祝いました。1995年、日本の国立大学で初めて「情報学」を冠する学部として設置された同学部は、「文工融合」の理念のもと、教育・研究を展開しています。また、30周年記念事業として学部キャラクターを募集。35作品の中から、高橋彩華さん(同学部3年)が考案した「じじじ」が最優秀賞に選ばれました。AIや情報技術をモチーフにしており、名称は、学部を構成する3つの情報系学科にちなみ「情報」の最初の音「じ」を3つ組み合わせたものです。



「じじじ」考案者の高橋さん
情報学部のシンボルとして活躍が期待されます